

九州ルーテル学院大学

Teaching Portfolio

2026



所 属： 人文学部心理臨床学科／大学院人文学研究科障害心理学専攻

名 前： 石坂 昌子

作成日：2026 年 5 月 29 日

教員氏名：石坂 昌子

所属：人文学部 心理臨床学科／大学院 人文学研究科 障害心理学専攻

1. はじめに

近年、学びの多様化が進む中、大学教育の質の確保・向上のために様々な取組みがなされている。筆者が2013年度に本学着任し14年目を迎えた今年度、2023年度から2025年度の3年間のティーチング・ポートフォリオについて更新する。今回のティーチング・ポートフォリオの作成と公表を通して、これまでの教育活動を可視化し、自身の理念と活動とのギャップへの気づきと整理をふまえ改善への道標としたい。

2. 教育の責任

本学における教育の責任として、学部では、心理臨床学科の共通教育科目と公認心理師養成に関連した専門教育科目（講義・演習・実習）、人文学科の共通教育科目（心理学）が挙げられる。大学院では、公認心理師養成に関連した授業科目（講義・演習・実習）を担当している。また、学部と大学院共に、卒業研究・修士論文に関する研究指導も実施している。これらの科目は、筆者の専門分野である臨床心理学を基盤として教育を担っている。授業以外としては、公認心理師国家試験対策講座を2023～2025年度に他教員と共に行った。

校務分掌では、2022年度より相談員長や自己点検・総合評価委員会委員に、2023・2024年度に大学院FD担当として責務を果たしている（詳細は2(2)教育組織運営参照）。また、2025年度は心理臨床学科紀要「心理・教育・福祉研究第25号」の担当を務めた。

(1) 授業科目の担当

2023～2025年度は、本学の学部及び大学院にて以下の表の科目を担当している。

【学部】

科目名	開講年度時期	履修者数	備考
フレッシュマン・ゼミ	2023 年度前期	20 名	共通教育必修
心理学	2023-2025 年度後期	23-27 名	共通教育選択
心理臨床学の基礎	2023 年度前期	61 名	心理臨床学科専門必修
心理臨床学の展開	2023-2025 年度後期	62-72 名	心理臨床学科専門必修
心理学概論	2023-2025 年度前期	64-71 名	心理臨床学科専門必修
感情・人格心理学Ⅰ	2023 年度前期	77 名	心理臨床学科専門選択 2023 年度で閉講
感情・人格心理学	2024-2025 年度前期	45-55 名	心理臨床学科専門選択 2024 年度から感情・人格 心理学Ⅱと統合
心理的アセスメント	2023-2025 年度前期	42-67 名	心理臨床学科専門選択
心理演習Ⅰ	2023-2025 年度前期	18-24 名	心理臨床学科専門選択

心理実習Ⅰ	2023-2025 年度前期	18-24 名	心理臨床学科専門選択
心理実習Ⅱ	2023-2025 年度後期	16-20 名	心理臨床学科専門選択
心理実習Ⅲ	2023-2025 年度前期	13-20 名	心理臨床学科専門選択
特別研究	2023-2025 年度後期	5-8 名	心理臨床学科専門必修
卒業研究	2023-2025 年度通年	4-8 名	心理臨床学科専門必修

【大学院】

科目名	開講年度時期	履修者数	備考
心理的アセスメントに関する理論と実践	2023-2023 年度後期	5 名	人文学研究科専門必修
心の健康教育に関する理論と実践	2023・2025 年度	10 名	人文学研究科専門必修 隔年開講
心理実践実習Ⅱ	2023-2025 年度通年	5 名	人文学研究科専門必修
心理実践実習Ⅳ	2023-2025 年度通年	5 名	人文学研究科専門必修
心理実践実習 A	2023-2025 年度通年	5 名	人文学研究科専門必修 保健医療分野共同担当
心理実践実習 B	2023-2025 年度通年	5 名	人文学研究科専門必修 司法・犯罪分野担当
研究指導	2023-2025 年度通年	1-2 名	人文学研究科専門必修

■ 主要授業科目

「**心理臨床学の基礎**」心理臨床学科Ⅰ年次前期の必修科目である。心理臨床学科での4年間の学びの概要を理解すると共に、グループワーク等の少人数の演習を通して心理臨床学科間での交流を深め、各コースの先輩方の講話を通して今後の学びや将来の目標を考え、心理臨床学の基本的なコミュニケーションを身につける。Ⅰ年次アドバイザーの2023年度に共同担当となった（2023年度より内容変更）。

「**心理臨床学の展開**」心理臨床学科Ⅰ年次後期の必修科目である。心理学と精神保健福祉の分野において実際に行われている研究や実践について、学生が具体的なイメージを持てるよう、心理臨床学科の各専門分野の教員達及び本学卒業生が自身の取り組んできた活動に関する紹介を行う。オムニバス形式のもと、「3つのアイデンティティ」をテーマに1コマ担当し、これまでの臨床歴や難病支援等の研究、本学での教育について紹介をした。

「**心理学概論**」心理臨床学科Ⅰ年次前期の必修科目である。心理学の知見を基礎から応用まで幅広く概観しながら、人間の心の働きについて学修し、自己と他者を客観的に観察する目を養い、人間への理解を深めていく。和田教授が主に担当をしており、筆者は心理的アセスメントと心理的支援に関する2コマを実施している。

「**心理的アセスメント**」心理臨床学科2年次前期の専門選択であり、公認心理師養成科目である。心理的アセスメントの目的及び倫理、諸概念等について学んだ後、臨床現場でよく使用される方法について紹介し、観点及び展開を理解する。また、テストバッテリー、包括的解釈と適切な記録及び報告、各分野における事例検討もふまえ、アセスメントの実際を学ぶ。対面及び Moodle 上での質疑応答やディスカッション等も通して、個人の理解が深まると同時に心理的アセスメントそのものが有効な支援技法ともなりうることを学ぶ。

「**心理演習Ⅰ**」心理臨床学科3年次前期の専門選択であり、公認心理師養成科目である。主に心理検査に関する演習を行う。臨床現場でよく使用される心理検査をテストの被検者やロールプレイング、ディスカッション等を通して実習し、公認心理師の業務に必要な心理支援のなかでも特に心理検査に関する知識及び技能の基本的な水準の修得を目的とする。高野教授と共同で担当しており、主にパーソナリティ検査（質問紙法・作業検査法・投映法）を担当している。

「**心理実習Ⅰ**」心理臨床学科3年次前期の専門選択であり、公認心理師養成科目である。教育分野と産業・労働分野の実習を通して、心理に関する支援を要する者へのチームアプローチ・他職種連携及び地域連携・公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解について学ぶ。教育分野では実習の事前事後と巡回指導を共同で担い、産業・労働分野では2024年度よりブリヂストン熊本より講師招聘をはじめマネジメント・事前事後指導を担当している（2025年度は心理実習Ⅲへ移動となったので、産業・労働分野のみ実施せず）。

「**心理実習Ⅱ**」心理臨床学科3年次後期の専門選択であり、公認心理師養成科目である。福祉分野と司法・犯罪分野の実習を通して、心理に関する支援を要する者へのチームアプローチ・他職種連携及び地域連携・公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解について学ぶ。福祉分野では実習の事前事後と巡回指導を共同で担い、司法・犯罪分野では2024年度より隈本少年鑑別所（法務少年支援センターくまもと）より講師招聘をはじめマネジメント・事前事後指導を担当している。

「**心理実習Ⅲ**」心理臨床学科4年次前期の専門選択であり、公認心理師養成科目である。医療・保健分野の実習を通して、心理に関する支援を要する者へのチームアプローチ・他職種連携及び地域連携・公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解について学ぶ。実習の事前事後と巡回指導を共同で担当している。

「**特別研究**」心理臨床学科3年次後期の必修科目である。はじめにブレイン・ストーミングを通してアイデアの言語化、発信、共有、整理をし、心理学関連の文献検索方法について学んだ後、全員が研究論文の概要をプレゼンテーションし、その内容についてディスカッションすることで、より多くの心理学的事象やそれに基づいた研究にふれ、理解を深める。同時に自分の興味のある研究領域を見つけ、卒業研究のテーマを自ら設定し、問題と方法までをまとめる。

「**卒業研究**」心理臨床学科4年次後期の必修科目である。「特別研究」に引き続き、これまでに

学んだ専門科目の知識と技能を基盤とした研究を行う。各自の関心のあるテーマに基づいた研究を通して、文献・データの収集・分析、結果のまとめ方、論文の書き方、発表の方法等を学ぶ。論文提出後、発表会で発表・質疑応答を実施する。特に、指導の際は、探究心と主体性を重んじながら、4年間の集大成としての卒業研究論文を制作する。

本学での教育以外の教育実践は、以下の通りである。

- 非常勤講師 「死生学」(2024-2025 年度後期 尚絅大学短期大学部総合生活学科 2年生 5-14名)

医療技術の進歩、少子高齢化、家族形態の変化等に伴い、生や死に関するテーマが多様化・複雑化してきている現代社会のもと、心理学の視点から生や死に関するテーマを扱い、死生観を見つめ直しながら「生と死の意味づけ方」について考えていく。視聴覚映像や事例を通して、倫理的配慮もおこないつつ進めた。

- 出張講義 「身近な心理学」(2025 年 3 月 12 日 熊本県立菊池高等学校 1・2 年生 9 名)
高校 1・2 年生を対象とした進路ガイダンスの一環として出張講義を実施した。心理学の基礎と心理職について説明をした後、クイズ形式にて心理学の専門知識を問い、種明かしと称して研究論文を用いながら解説をおこなった。高校では専門的に学ぶ機会の少ない心理学について、可能な限り関心を高め意欲的に受講できるよう努めた。

(2) 教育組織運営

2022 年度より相談員長としてハラスメント防止や対応、マネジメントを担当し、学生及び教職員のこころの健康の維持・向上に努めてきた。心理臨床学科のアドバイザーとしては学生の大学生活全般に関する相談を担い、よりよい学生生活を築いていけるようサポートしている。同じく、2022 年度より自己点検・総合評価委員会に所属し、ビジョン 2020 のもとと教育を含めた点検・評価の一端を担っている。

また、2023・2024 年度の大学院 F D 研修を担当し、2023 年度は①「心理・教育分野の研究倫理について」(講師:熊本大学大学院教育学研究科 菊池哲平教授、2023 年 12 月 26 日)、2024 年度は②「公認心理師養成の現状と課題について」(講師:別府大学文学部・大学院文学研究科 矢島潤平教授、2024 年 2 月 14 日)及び Zoom にて③「聴覚障害学生の大学院における修学支援について—公認心理師養成に焦点を当てて—」(講師:文教大学教育学部 佐々木順二教授、2025 年 3 月 18 日)の研修会を実施した。なお、①と③は大学院生や学部生も参加をし、共に研究倫理や聴覚障害学生の修学支援について考える機会とした。

2025 年度は、学科発行紀要「心理・教育・福祉研究第 25 号」の編集担当となった。原稿募集から、7 本の資料論文の投稿、受理、編集までの作業を行った。次年度以降は、昨今の状況をふまえて、九州ルーテル学院大学「紀要 Visio」の年間発刊回数を増やす機会を確保し、本紀要は 25 号をもって最終号となった。

3. 教育の理念

本学の教育の基本理念をふまえ、建学の精神「感恩奉仕」に則り、幅広い教養教育と専門領

域における高度な教育研究、社会へ貢献する人材の育成を念頭におき、以下の3つの理念のもと教育を行っている。

(1) 理念1 探究心と主体性の育み

幅広いリベラル・アーツ教育と心理学等の専門分野の基礎知識と技術をふまえ、自分自身や他者、人間環境を幅広い視点で理解すると共に、現代社会の問題、地域・現場の課題及びニーズを多角的に捉え直し、主体的に問題解決へ至る態度を育むように目指したい。そのためには、日々の生活のなかでの探究心や主体性、広い視野から物事をアセスメントすることが求められる。筆者のゼミでは、「なんでだろう?」「やってみよう!」の気持ちを大切にと伝え、学びや研究に真摯に取り組みながら、その楽しさ、苦しさ、醍醐味を一緒にみつける姿勢を重んじている。地域・社会に貢献できうる人材の育成を目標に、特に探究心と主体性を尊重し育ていきたい。

(2) 理念2 自己理解、他者理解及び自己と他者のコミュニケーションの深まり

心理臨床学科には心理学へ関心を抱き入学してくる学生が多いが、全員が心理職の道に進むわけではない。また、人文学科の共通教育科目（一般教養領域）の選択として心理学を学ぶ学生もいる。在学中はもちろんのこと卒業後の日常・社会生活で学修した心理学の知見を活かせるように、自分自身や他者のこころの理解に努め、自己と他者のコミュニケーションが深められるような教育を心がけている。この自己理解、他者理解及び自己と他者のコミュニケーションの深まりは、こころの適応や円滑な人間関係の構築へとつながり、日々の生活や心理職のみならず他職種においても活用できると考えられる。

(3) 理念3 心理学の理論と実践をふまえた社会で活躍する心理職の養成

現在、公認心理師・臨床心理士を志す学部生・院生の授業や研究、大学院進学・公認心理師国家資格試験合格のための指導を行っているが、これまでの医療・教育現場での臨床と研究をふまえて、心理学の理論と実践をふまえた社会で活躍する心理職の育成に努める。また、在学中のみならず卒業後のリカレント教育も視野に入れて職業的成長も促していきたい。

4. 教育の方法

教育理念との関係では、以下の点を重視した教育方法をとっている。

(1) ICTを活用したアクティブ・ラーニングの実施

学生達が能動的に学ぶ手法としてのアクティブ・ラーニングを積極的に実施している。例えば、授業でのグループディスカッションや心理検査での被検者・検査者のロールプレイング、その後に互いの役割からのフィードバックの実施、プレゼンテーション後のディスカッション、事例検討等が挙げられる。また、コロナ禍を機に2020年5月より遠隔授業が開始されており、COVID-19の感染状況が落ち着いた後でも遠隔授業で培ったICTの手法をアクティブ・ラーニングに活用している。例えば、毎回の授業後に、Moodleのフォーラムへの受講生による投稿を通して、感想・質疑応答・ディスカッションの場を設けている。その投稿をふまえて、

今回の授業開始時に教員よりフィードバックを行い、教員-学生や学生間の双方向的な授業展開となるように工夫しつつ、授業理解度を把握し、授業内容の改善をし、学生の探究心と主体性の育成につなげている。

(2) 日常生活・社会生活に活かす心理学の基礎的知識と技術の伝授

高校までは専門的にあまり学んでこなかった心理学について、1年次と2年次の授業では、音楽や絵画、映画等の視聴覚機材を用いたり、日常生活にそくした事例を提示したりして、心理学の楽しさや身近さにふれると共に、自分や周囲、社会と結びつけられるように促進している。心理臨床学科3年次以降は、自己や他者に対する理解、日常生活・社会生活・臨床現場等での活用を念頭に、より専門的な心理学の知識と技術の修得を目標としている。(1)のアクティブ・ラーニングも通して、自分の気づきや考え、思いを表現し、伝え、理解し合うことで、自己理解と他者理解のみならず自己と他者のコミュニケーションの深まりも期待できるであろう。

(3) 現場をみすえた心理職養成の教育・研究

公認心理師実習の授業履修前は、授業内容と関連した精神疾患や医療等の視聴覚教材の活用、心理職としての経験や事例の紹介等を通して、具体的に臨床現場を理解できるように工夫している。実習の事前指導では心構えから記録の書き方、巡回指導では心身の調子にも配慮した声かけ、事後指導では現場を客観的・多角的に振り返る時間を重視している。また、大学院では積極的にこれまでの事例や研修会での資料を提示しながら学びを深めるようにしている。同時に、現場のニーズや課題をふまえた大学院の研究計画書作成、卒業研究論文や修士論文の制作の指導を努めている。修了後は、リカレント教育の一環としての研修相談員のスーパーヴィジョンを実施している。以上のように、臨床の実践と研究をふまえた心理職の養成を目指し、現場をみすえた教育・研究となるように進めている。

5. 教育改善のための努力

(1) 改善努力1 グループワークやディスカッション、質疑応答の設定の工夫

授業評価アンケート結果からは、特に講義形式の授業において「グループワークやディスカッション、質疑応答の少なさ」が低い評価となっていた。対面でのグループワークへの取り組みでは履修生間で意欲や積極性に差がみられた。また、ディスカッションや質疑応答の場としてMoodleのフォーラムに毎回、感想や質問等を投稿する形式を活用したが、一部の履修生の利用にとどまってしまっている。履修生の意欲や自主性にゆだねるのではなく、グループワークやディスカッション質疑応答の設定自体の仕方に工夫をしていきたい。

(2) 改善努力2 学部・大学院の公認心理師養成における合理的配慮

昨今の公認心理師養成の実情に照らし合わせると、特に学部のアクティブ・ラーニングや演習、実習、また大学院の演習、実習での合理的配慮をふまえた修学支援が改善努力として挙げられる。そのため、学内での教職員や学外実習施設との連携に加え、公認心理師養成機関連盟の研修会や実習演習担当教員養成講習会に参加をして質問したり他大学・大学院教員とディスカッションしたり、大学院FD研修会を開催したりしている(2(2)教育組織運営参照)。今後もう

人ひとりの状態にそった合理的配慮を授業の到達目標もふまえ検討すると共に、実習先との連携をもとにした研究も進めていきたい。

6. 教育の成果・評価

授業評価アンケートからは、概ね平均以上の評価をえられているが、特に人数の少ない特別研究や卒業研究、大学院の評価は匿名性の担保のしづらさもあり、まだ改善すべき点があるのではないかと推測される。また、筆者のみの教育の成果ではないが、学部生が本学大学院や他大学院の公認心理師や臨床心理士の養成課程へ合格していること、2023・2024年度の本大学院第一期生から2年連続して公認心理師国家資格試験の合格率が100%、2025年度は合格率80%（現役5名中4名合格）の結果がえられている。

7. 今後の教育に関する課題と目標

今回のティーチング・ポートフォリオの作成を通して、教育の理念と方法が合致しない部分のあることが課題として挙げられる。特に、探究心と主体性の育みという理念のもとアクティブ・ラーニングを実践しているが、授業評価では「グループワークやディスカッション、質疑応答の少なさ」が低い結果となっている。授業評価アンケートを真摯に受けとめながら改善をしていきたい。また、昨今の現状として、先述した合理的配慮をふまえた公認心理師養成における修学支援の課題（5.教育改善のための努力）に加えて、Chat GPTを含めたAIツールの使用に関してはさらなる学びが必要である。時代や現場のニーズと課題にそくしたよりよい学びの場をつくっていきけるように、自己研鑽にも努めていきたい。

【根拠資料】

- ・担当科目シラバス（2023～2025年度）
- ・授業評価アンケート結果（2023～2025年度）
- ・第7～9回公認心理師国家試験学校別合格率（厚生労働省ホームページ）